

国際協力を学ぶ意義： 協力と支援を正義・地方自治から考える

実践教科：公民科
対象学年：高校1年生 対象人数：41名

広島市立
基町高等学校

河村 新吾

●担当教科●
公民科

実践の目的

ネパールを通して、国際協力（支援）の意義を考察し、ネパールで学んだことを広島県（市）の問題に関連付けて得た知見を転移させる。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ネパールを知ろう：日本との共通点と相違点を学習して、ネパールを身近に感じさせる。	(1)2つの大国に挟まれた国：インドと中国に挟まれたネパールと中国とアメリカに挟まれた日本の現状を知る。 (2)一日1.25ドルに満たない生活をしている人のいる絶対的貧困のネパールと相対的貧困率が上昇し16%の日本とを対比する。 (3)水事情の両国の相違から気づくことを確認する。	(1)教科用図書 (2)現地写真 (3)A5の色画用紙
2	国際協力（支援）について考えよう：なぜ協力（支援）するのか、どのように協力（支援）するのか、その基底とする価値について吟味する。	(1)国際協力（支援）について総論的知見を表明する。クラス全体の意見の動向を知る。 (2)国際協力（支援）について各論的知見を表明する。主体・対象・内容について各班に分かれて吟味し発表する。 (3)各班で提案されたものを総合化してどのような国際協力（支援）が可能かの情報を共有する。	(1)中国新聞記事 (2)独自教材 (3)新聞写真
3	ネパールへの協力（支援）をデザインしよう：各班で出した提案を共有する。	(1)日本の国際協力（支援）の歴史を確認する。 (2)ネパールの子どもの実態を知る。 (3)可能な協力（支援）を提案して情報を共有する。	(1)独自教材 (2)現地写真
4	広島県（市）へ提案をする：国際平和文化都市をデザインするなど地方自治へ応用する。	(1)理想の広島県（市）を考える。 (2)現実の広島県（市）の課題を知る。 (3)可能な改善点を提案してネパールとの共通課題「経済と教育」について考える。	(1)独自教材 (2)『広島県の未来を考えてみよう！：これから大人になるみなさんに向けて』(広島県総務局作成) (3)広島県の未来を考えてみよう（はがき）

②(眼) 国際協力（支援）について考えよう

ねらい：なぜ協力（支援）するのか、どのように協力（支援）するのか、その基底とする価値について吟味する。

コメント：カラー写真で構成された独自教材そのものを通して授業展開を説明する。次のものは独自教材の冊子の表紙である。これはホームステイ先の近所の表札である。（ヒンドゥー教の神の一人であるガヌーシャを模写していると思われる。）また付随した文章はJICA理事長の国連難民高等弁務官の時代の言葉である。授業のヒントにするために記載した。生徒は文章よりも表紙絵にインパクトを受けた。



Even if cultures, religions and beliefs are different, what's important is saving the lives of people who are suffering. Peace that exists solely in your country is no peace, because every nation's fate is bound up in that of others.

文化、宗教、信念が異なると大切なのは苦しむ人々の命を救うことです。自分の国だけの平和はありません。世界はつながっているのですから。

元難民高等弁務官 緒方貞子

コメント：次の場面は前回の授業を振り返って水問題へと誘導するものである。

前回の学習「石鹼がないときはどうしたらいいのでしょうか？」

8月7日月曜日シャンジャ郡の
Laxmi Higher Secondary Schoolでの質疑応答
河村「石鹼がないときは、どうしていますか？」

Aさん「石鹼がないときは、灰を使って洗っています。」

(閑話休題)



Cさん「日本では、石鹼がないときはどうしていますか？」

コメント：日本では石鹼がなくても別の代替品等で衛生状態を維持している。この少年がいわんとしていることはそのことではなく日本自体が衛生問題に正面から向き合っているのかということが聞きたいのである。

9月17日土曜日広島市の基町高等学校での授業風景

河村「ネパールの14歳の中学生に『日本では、石鹼がないときはどうしていますか？』と聞かれました。あなたならどう答えますか？」

Dさん「石鹼がなくても、普通に水で洗ったらいいと思います。」

河村「ネパールと日本の水事情について学習してみましょう。」



コメント：日本の衛生状態とネパールのそれとの比肩ができないため上記のような答弁になっている。これをチャンスととらえ水の問題への導入とする。広島市は全国で5番目に近代水道が敷設されたところである。それまでは三角州のため井戸水に海水が入り苦労していたことや日清戦争遂行のために敷設された経緯など話すとともにネパールのインフラ整備の不十分さから衛生状態のよい良質の水の確保が問題となっていることを話した。

コメント：次からが本授業の中心的部分に入る。

9月26日月曜日「国際協力（支援）を正義から考える」

I 日本は、国際協力（支援）についてどうしたらよいですか？

- | | |
|------------------------------|--------|
| ①経済大国世界第3位だから、これからもしたほうがよい | _____名 |
| ②長い間やってきたのだから、もうやめたほうがよい | _____名 |
| ③第2位から落ちたのだから、今度はしてもらったほうがよい | _____名 |

コメント：①36名②1名③2名であった。総論としては圧倒的多数が国際協力（支援）をすればいいと考えていた。予想通りの展開である。次に東日本大震災の被災がわかる写真（資料1）を見せる。これによって生徒の思考に変化が生じる。各論として具体的に考察するとどこまで国際協力（支援）をすればよいかわからなくなるからである。

II [A] 国際協力（支援）は、したほうがよいですか？

各班で、5分間議論をしてください。早く結論が出たところは、挙手をして意思表示してください。司会者に発表してもらいますので、一番大きな理由を選んでおいてください。（時間切れになった班は、どんなことが話題になったか、司会者はコメントを出してください。）

コメント：（ A ）には「東日本大震災から復興していないのに」が入る。今まで通りの協力や支援とは違った形になったとしても、なんらかの貢献ができるのか、生徒は真剣に話し合いを始める。

III 國際協力（支援）は、どのようにしたらよいでしょうか？

次の①～③の3つから選んでください。どれを選んだか前にいる司会者が聞きますから応えてください。偏らないように協力してください。Ⅱと同様に結論だけでなく理由を考えてください。

() は議論のヒントです。

①国際協力（支援）は、誰が中心となってやったほうがよいのか。

(政府なのか 個人なのか NGOなのか どこが適切か)

②国際協力（支援）は、どこに対しておこなったほうがよいのか。

(日本に近い国なのか 一番困っている国なのか どちらの国からか)

(民主的国家に限るのか 困っている国であればどこでもよいのか)

③国際協力（支援）は、どんな内容を中心とすればよいのか。

(現金を渡して好きなように使ってもらうのか 限定するのか)

(現地が必要な人材を派遣するのか 必要な物品に限定するのか)

コメント：真剣に話し合いを始めさせるために観点を用意した。漠然と話すのではなく、主体・対象・内容に分かれることで作業は分散化するが全体像は生徒に見せるようとする。

コメント：時間内で話し合いが終了しなくとも暫定的意見として途中経過を各班に発表させてみる。それを司会進行の班が黒板に記録して最後に情報を共有させる。それらから全体の傾向を指導者がまとめるという手法をとった。今回の授業は参観者がいたので次のように感想文を書かせて参観者に披露した。

IV 本日の感想を書きましょう。（HR委員は回収して持ってきてください。）

資料1 「この写真から何がわかりますか」

コメント：持ち物や背景から日本人であることがわかる。

東日本大震災後の避難生活での生活状況をこの写真の中から読み取らせる。（4リットル入りの水を2本、すなわち8キロの重さの水を運んでいる。少年の平均体重を考えると体重の約4分の1の重さに耐えているのがわかる。）このように子どもが体を張って子どもなりの協力や支援をしている姿に共感させる。



(中国新聞2011年9月6日)

コメント：次回の授業の予告し下のような参考になるものを付隨させて思考が切れないようにする。

次回の予告「ネパールとの絆を見つけよう」



参考

The strong family bonds have been credited with playing a big role in the nation's prosperity.

(強固なかぞくのきずながこの国の繁栄に大きな役割を果たしていると信じられてきた。)

←Eさんのメッセージカードです。

次の質問が問題意識です。学期間休業中に調べてみましょう。

- ① 1945年敗戦後日本は、国富の（ 1／2 1／3 1／4 ）を失いました。
- ② 1951年平和条約の際、スリランカは日本に賠償金を要求しませんでした。それは（ ヒン
ドゥー教 キリスト教 仏教 ）の教えに基づいたからです。
- ③ 戦後復興したのは1956年です。その2年前に、日本は、国際協力（支援）をすることを決
めました。その訳は、（ 本日の授業を参考にしましょう ）。
- ④ 次の図はネパールの子どもたちの現状です。和訳してみましょう。



(ネパール同行者による写真)

コメント：学期間休業に入り自学自習できる環境にある。それを利用して予習させる。次の単元は日本の政治に入るので地方自治との関連でネパールを通じた学習があることを予告する。

生徒の反応

- ・支援は大切なことだけれど今の日本は大変なことになっているのでどうすればよいか最初はわからなかった。
- ・困っている国には発展のために人材を派遣するのがよいのかもしれないけれど学校などでは物資の方が助かると思った。
- ・今の日本は国債発行により借金が多いのだけれども国際社会で生きていくには国際協力の中でできることをしていくことが大切だと思った。
- ・考えるのは苦手意識があるのだけれども違う意見を聞きその理由を聞くことができたので楽しかった。
- ・東日本大震災という条件が付くとそれまで国際協力を全面的にすべきだという人が急に少なくなったのに驚いた。具体的に考えることが大事であることがわかった。
- ・今まで理解できなかった組織の役割について知ることができてよかったです。
- ・どの国に対しても支援するといつても拉致問題のある北朝鮮にも支援するのは正しいことなの

かずいぶん迷った。お金を政府に渡したら困っている人ではなく軍事的なことに使われるかもしれないし国民に届くか不安だからだ。

- ・東日本大震災の中で具体的に誰が何を送るのかなど考えてみるとさまざまな疑問や難点が浮かび上がってくることが今回の話し合いで分かった。
- ・普段の授業では国際協力をすべきかどうかを考えて発表することはないので楽しかった。
- ・ほかの人の意見を聞くことによって自分の意見をもつことができた。視野が広がったことがよかったです。
- ・たった一枚の写真で意見が変わり又ほかの人の意見を聞いて考え直したり自分の意見をくつがえさせられたりさまざまな感情を持つことができた。トンガの募金の話に感動した。

所 感

ネパールで学んだことを投げ入れ教材にして学習するのではなく正規の教育課程に極力取り組むようにした。今回の単元は現代社会の「国際経済の動向と日本の役割」の中の「国際協調と日本の役割」で実施した。定期考查の問題にも「顔の見える援助・協力」について意見文を求めるなどして授業中に考えたことが評定につながるように工夫した。「顔の見える」という視点で必要な物品よりも援助・協力した人の願いが分かるもの的重要性を考えるようになった。その結果日本には教育がある一定水準以上あるので産業発展のノウハウを伝えるような人材派遣がよいと考える生徒が多いことが分かった。

本授業は国際経済が中心の大単元であった。その前の国際政治の大単元のときに敵を倒すハードパワーを持たない日本は味方を増やすソフトパワーを生かさなくてはならない点を強調しておいたので本授業のよい伏線となった。

東日本大震災があり財政的にも厳しいことがあるがそれよりももっと厳しい国があることを知り日本だけの繁栄はあり得ないことを生徒が考えるようになった。

全体を通しての成果と課題

ネパールを通して国際理解を深める際に事前研修においてネパールを教えるのではなくネパールで教えるのだと先人の方に習った。そこで単なる投げ入れ教材にせずネパールの実践授業を正規の授業に寄り添う形でカリキュラムを工夫し授業創造に努めた。ネパールという具体的な国を通して指導者側も実際にネパールに訪問しての教材であったため生徒への語りかけが抽象的な言葉の羅列になることなく進行することができた。

参観者を招いての研究授業では国際経済の単元であるため円借款を中心とする話題が多数出るかと思われたが人材の派遣が中心となった。これは単に財政的に負担をかけたくないというものではなく人的な支援こそが経済的発展の礎であるという生徒の認識にもとづくものである。これが分かったのは後続の授業である地方自治のまとめにおいて実践した授業「広島県(市)やネパールへの提言」においてである。すなわち諸提案の根本にある考えは「経済発展が先か教育普及が先か」のどちらかであり生徒は経済的繁栄がたとえ遅れてでもすべての人に教育を行き渡らせることが重要であると選択をしたのである。

以上をまとめると成果としては政治や経済など多面的な視点から国際理解ができるようになったところをあげることができる。また課題としては自分たちが提言したことを実際に行政に届けたり自分たちにできることを実行したりすることである。

参考資料

【書籍】

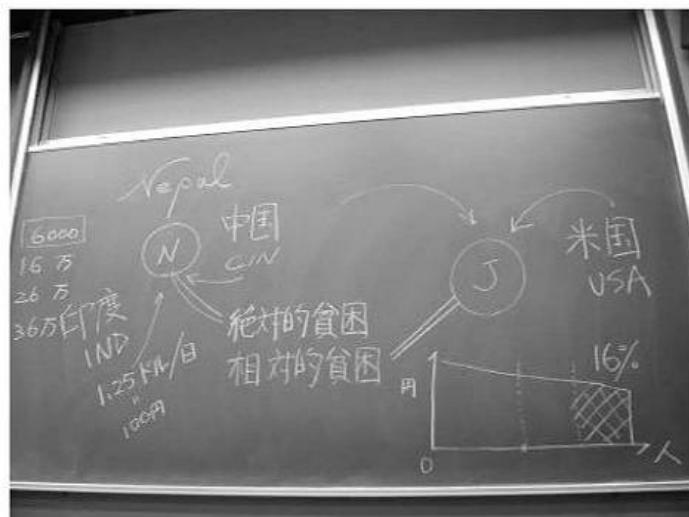
- ・(社)日本ネパール協会編『ネパールを知るための60章』(明石書店、2000年)
- ・奥田和子『食べること生きること：世界の宗教が語る食のはなし』(編集工房ノア、2003年)
- ・黒田一雄、横関祐見子編『国際教育開発論：理論と実践』(有斐閣、2005年)
- ・国際協力機構編『1人ひとりにできること　1人のためにできること』(ダイヤモンド社、2008年)
- ・根深誠『ヒマラヤのドン・キホーテ：ネパール人になった日本人・宮原巍の挑戦』(中央公論社、2010年)
- ・田中雅一、田辺明生編『南アジア社会を学ぶ人のために』(世界思想社、2010年)
- ・(財)ユネスコ・アジア文化センター『ひろがりつながるESD実践例』(ACCU、2011年)

【映像資料】

- ・筆者や同行者が撮影した写真、資料1は3月14日の宮城県気仙沼市での写真

【インターネット】

- ・「外務省ネパール国基礎データ」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nepal/index.html>



(授業中の板書事項)